

卒業論文

「作家タフスィン・ユジェルの描くエルピスタン 『髭の話』を中心に」

外国語学部 南・西アジア課程 トルコ語専攻

学籍番号 8500080

4年 尾田郁子

目次

はじめに	1
第一章：作家タフスィン・ユジェルと文学	2
(1) 生い立ち / 人生	2
(2) 特徴	5
(3) 作品紹介	8
第二章：Bıyık Söylencesi (『髭の話』)	13
第三章：タフスィン・ユジェルのエルピスタン	18
(1) タフスィン・ユジェル自身が語るエルピスタン	18
(2) Bıyık Söylencesi (『髭の話』) 中のエルピスタン	19
(3) 「エルピスタン」の役割	29
終わりに	30
参考文献	31

はじめに

共和国以降、現代トルコ文学の潮流は、時代の流れとともに様々な変化を経て現在に至っている。現代トルコ文学は、実に多様な側面を持ちつつ、活発に展開しているものの、日本ではまだほとんど知られていない。トルコ文学に関する研究も、残念ながら他の分野に比べて極端に少ない。しかし、文学は、芸術作品でありながら、同時に、その国の文化や社会を知るための良い材料でもある。そこで本稿では、現代トルコ文学において活躍する作家の一人であるタフスィン・ユジェルと彼の作品を取り上げてみたい。

タフスィン・ユジェルは、一般的にアナトリアの社会や村の現実を描く作家として位置付けられている。¹特に、彼は、故郷の町エルビスタンを作品の中でしばしば描いている。エルビスタンは彼の作品の一番の特徴と言える。では、なぜ彼はエルビスタンを描き続けるのか。それは、作家として、エルビスタンを描くことで、彼は、世の中に自身の考えを主張できるからであろう。つまり、作品のエルビスタン像を知ること、そこでの彼の主張を本質から知ることが可能になる。

本稿では、タフスィン・ユジェルの *Biyyık Söylencesi* (『髭の話』) における「エルビスタン」像を鮮明なものにし、それが作品の中で果たす役割について考察していきたい。これにより、タフスィン・ユジェルの主張の本質を明らかにすることが、本論文の目的である。

その手順として、第一章では、タフスィン・ユジェルの人生や、作品の特徴、作品の紹介を通して、全体的に彼自身と彼の文学について見ていく。第二章では、*Biyyık Söylencesi* (『髭の話』) を取り上げた理由と作品のストーリーを紹介する。第三章では、彼の描く「エルビスタン」像はどのようなものなのか、また、その「エルビスタン」は *Biyyık Söylencesi* (『髭の話』) にどのような効果を与えているのか考えていこうと思う。

¹ Mahil Ünlü, Ömer Özcan, 20. *Yüzyıl Türk Edebiyatı 4*, İnkılap Kitapevi, 1991, p. 225.
以下 20. *Yüzyıl Türk Edebiyatı 4*

第一章：作家タフスィン・ユジェルと文学

この章では、作家タフスィン・ユジェル自身と彼の文学について見ていきたい。彼の人生と作品については、カーン・オズカンの研究書 *Görünmez Adam: Tahsin Yücel Kitabı*²がある。なお、ここには、タフスィン・ユジェルとのインタビューが含まれている。この章では、主にこれを用い、以下、(1) 生い立ち / 人生、(2) 特徴、(3) 作品紹介を追って見ていくことにする。

(1) 生い立ち / 人生

まず、誕生から少年時代の様子について見てみよう。

タフスィン・ユジェルは、1933年に東南アナトリア、マラシュ県にある町エルビスタンのオテゲチェ地区で生まれた。家庭は複雑で、彼の父母はともに再婚であったため、父方にも母方にも歳が離れ、既に家を出た姉が一人ずついた。両親の間には4人の子供があり、タフスィンはその末っ子だった。しかし、彼が生まれる前に姉の一人が他界していたため、オテゲチェの家では両親と兄と姉の5人で暮らしていたという。

彼の話では、幼少期の生活は自然と密着したものだだったようだ。自然は生活や成長の第一の要素だったという。家には、牛、鶏、アヒル、猫などさまざまな動物がいて、それらとともに暮らすことで、生き物の生、性、死を学んだと、彼は振り返っている。

幼少期は第二次世界大戦の時期でもあった。彼によれば、その頃はまだ戦争に関心を抱く歳ではなかったが、貧困の原因として戦争を認識していたそうだ。兄がパチンコの石を当てて打ち落とした1羽のムクドリの出汁でピラフを3回作り、1週間持たせるというエピソードもあるが、そのような貧しい生活が続いたらしい。

1939年、エルビスタンのガズィパシャ小学校 (Gazi Paşa İlkokulu) に入学した。しかし、その1年前から、兄に読み書きから四則計算まで教え込まれ、それらを習得していたためか、学校では質問もせず、指名もされない、目立たない生徒だったと語る。しかし、4年生の時に学芸会や式典で自作の詩の朗読を始め、学校でも街でも評判の人となったそうだ。それは2年間くらいのことではあったが、自分が有名人になる喜びを味わったと語っている。

さて、中学・高校時代のエピソードに移ろう。

小学校を卒業すると、裕福でない家の子の多くは、無料全寮制の中学への選抜試験を受けた。³タフスィンもこの試験を受けた。その出来が良く中学高校一貫校であるガラタサラ

² Kaan Özkan, *Görünmez Adam: Tahsin Yücel Kitabı*, Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, 2001
以下 *Görünmez Adam*

³ 1945年当時、貧しい家の子供でも、選抜試験に通れば、無料で寮に入り中等・高等教育を受けられる制度があった。

イ高校 (Galatasaray Lisesi) に入学できる 8 人の中に入れたことは、本人にとって思いがけない幸運だったと話している。しかし、試験の結果が分かる 2 ヶ月ほど前に兄が他界したため、母親は後に残った一人の息子を遠いイスタンブルに行かせるのに反対したそうだ。けれども、タフスインの意思は固く、「歩いてでも自分はイスタンブルに行く」⁴という強い主張に、母親も最後には同意したという。

ガラタサライ高校では、すぐにクラスの優等生になったそうだ。彼自身は、ガラタサライ高校での 8 年間 (1945 ~ 1953) は、最も美しく、後の人生を最も決定付ける期間だったと話している。⁵そして彼は、ガラタサライ高校を、「人間性や思想の元となる知識を得た場所」、「最も興味深い文化の一つであるフランス文化とフランス語に出会った場所」、「一生の友との友情が始まった場所」、「独自性、平等、自由という価値感を学んだ場所」と位置付けている。

高校時代には、タフスイン・ユジェルが現在のような作家になったきっかけとも言えるエピソードが数多くある。まず、彼が散文を書くきっかけになったと語る出来事を紹介しよう。

ガラタサライ高校に入学した年のことである。トルコ語教師に自由作文の課題を提出することがあった。彼が、所々に自分の詩を入れた作文を提出すると、それが気に入られ、日頃から書き溜めていた詩のノートを見せることになった。彼には、それも気に入られた様子に見えたが、教師は、「私の言う事を聞くのだったら、詩を書くのはやめて、散文を書きなさい。君はとても良い小説家になれるだろう。」と言った。この出来事から散文を書き始めた彼は、後に、教師の言葉に対して、「これは人生の中で最も良く、最も役立つ忠告だったと思う。散文を書くことで叙述の可能性の幅が広がり、散文を書くことが幸せを感じさせてくれるのだから。」と語っている。⁶

授業では、シェークスピア、ゴーゴリ、ドストエフスキーの作品に出会い、また、トルコのオルハン・ヴェリ、メリフ・ジェヴデット・アンダイ、ファズル・ヒュスヌ・ダアラルジャ、ジャヒット・ストウク・タランジュ、サイト・ファイク、オクタイ・アクバルの作品に初めて触れたという。また、フランス語を学んだことは、フランス文学をその言葉で読むことを可能にただけでなく、他の外国の文学を知る機会を与え、より言葉や文学への情熱を増大させたそうだ。

高校では、文学に興味のある同志が学年を超えて仲間になり、自分たちで *Galatasaray* という雑誌を出していた。中学や高校の頃から、小説家になろうと考え、既に実験的に作品を書いていた。この実験では、サイト・ファイク、オクタイ・アクバル、オルハン・ケマルといったこの時代の巨匠や外国の作家の書き方をまねたり、独自のテーマや形式の物語を作

⁴ *Görünmez Adam*, p. 35.

⁵ *Görünmez Adam*, p. 39.

⁶ *Görünmez Adam*, p. 34.

ろうと努力したようだ。

1950年、高校二年の17歳の時、ヤシャル・ナビが毎年出していた撰集 *Yeni Hikâyeler* (『新しい短編小説』) で初めて短編小説を出版している。

続いて、大学入学、本の初出版、出版社で働くきっかけについて見てみよう。

1953年、ガラタサライ高校を卒業し、イスタンブル大学 (İstanbul Üniversitesi) の経済学部に入學した。経済学部に入った理由は、文学とは別の分野の方が良いと考えたためだったという。しかし、結局、経済学部は彼に合わず、翌年、同大学の文学部フランス語小説言語学科 (Edebiyat Fakültesi Fransız ve Roman Filolojisi bölümü) に入り直した。その後、2000年まで (教授という形であるが) ずっとそこに在籍し続けたことからすると、「この選択は最も重要で、最も良いものだった」という。⁷

1954年には、初めての本 *Uçan Daireler* (『空飛ぶ円盤』) を出版した。当初、この時期の出版は彼自身もヤシャル・ナビも考えていなかったという。この急遽決まった出版には、次のようなエピソードがある。それは、1953年春、まだ高校生だったタフスィン・ユジェルがイスタンブルの通りで偶然サイト・ファイクに出会ったことに始まる。その場にいた友人の紹介でサイト・ファイクと知り合った。サイト・ファイクはタフスィンの短編小説をいくつか読んだことがあると言い、それらを集めて本にしないのかと尋ねた。タフスィンは仰天し、「まだ早いと考えている」と答えたところ、「どうして?」と再び問われ、この時から自分の本を出すことが頭から離れなくなった。高校卒業後、休暇のために故郷エルビスタンに戻った時に、ヤシャル・ナビにサイト・ファイクとのやり取りと出版の提案を書き、短い手紙を送った。また、働きながら大学に通うためにも、本の著作権料は励ましになるだろうことも付け加えた。ヤシャル・ナビの返答は、1954年初めに出版する予定を立てたことに加え、まだ仕事を見つけていなければ、自分のところで執筆、編集の仕事を与えるとあった。

こうして、1954年の *Uçan Daireler* (『空飛ぶ円盤』) の出版と、高校卒業後には大学に通いながらヴァルルック出版という出版社で働くことが決まったという。ヴァルルック出版では、1953年の終わりから1961年の終わりまで働いたという。その他にガラタサライ高校で助手としての仕事もしていたという。その一方で、この頃、執筆活動をしたり、翻訳を始めていた。

最後に、大学卒業から現在までを見てみよう。

1960年、大学を卒業すると、すぐに結婚した。翌年には一人目の娘が、その十年後には二人目の娘が生まれた。1960年は、初めての長編小説 *Mutfak Çıkmazı* (『行き詰まりの台所』) を出した年でもある。1961年には、自分の卒業したイスタンブル大学文学部フランス語小説言語学科に助手として入った。1963年、記号論の勉強のために、フランスの奨学生として1年間パリに滞在した。「記号論」という言葉や分野自体、まだ確立されていない時代だ

⁷ *Görünmez Adam*, p.50.

った。この学問との出会いは、1962年、イスタンブール大学で、フランスの記号論学者グレマス⁸の講義に助手として参加した事が始まりだったという。彼に、学位論文の相談をした時、タフスィンがフランス語で書いた大学の卒業論文を見せたところ、Greimasは、その論文が記号論的な観点で書かれていると言い、その論文を発展させることを薦めたという。そして、パリへの留学を経て、1965年、論文 *L'Imaginaire de Bernanos* (「ベルナノス⁹の想像の世界」)を書いた。その後も、記号論に関する論文をいくつか書いた。そのうちの 하나가、1972年、フランス語小説言語学科に勤務していた時に、助教授論文として書いた *Figures et messages dans la Comédie humaine* (「『人間喜劇』¹⁰における表情と意図」)である。これは、フランスでも出版された。この年、トルコでは *L'Imaginaire de Bernanos* (「ベルナノスの想像の世界」)のトルコ語版が出版された。その後もずっと、小説家として執筆活動を続け、本を出版しながら、教授としてイスタンブール大学に在籍し、2000年1月に66歳で退職した。

(2) 特徴

次に、タフスィン・ユジェルの描く作品の文学的な特徴を見ていくことにする。

・言葉の特色

言葉の特色の一つとして、「混ざりけのない」(arı)トルコ語¹¹を使う点が挙げられる。言葉や単語を作品の中でうまく使用しているとの指摘¹²があるように、意図的に言葉を選んでいる。ヌールッラー・アタッチの影響もあると思われる。¹³作品の中にとどまらず、カーン・オズカンとのインタビューの中でも、例えば「文化」を示す単語に *kültür* を使わず *ekin* を、「例えば」と言う時にも *mesela* でなく *örneğin* を使っているのが見られた。

⁸Algirdas Julien Greimas (1917~1992)。「パリ記号論学派」を形成。1962年当時、アンカラ大学言語歴史地理学部に籍を置き、イスタンブール大学では二週間に一度講義をしていた。その後、フランスのポアチエ大学の教授となる。1965年以降、ヨーロッパや南アメリカで、彼の記号論を追跡する研究が数多くなされた。代表的著書に1966年の『構造意味論』がある。

⁹ Georges Bernanos (1888~1948)。フランスの小説家。カトリック的立場から霊肉の相克を描いた。『悪魔の陽のもとに』、『田舎司祭の日記』などの作品がある。

¹⁰ バルザックの「ウージェニー＝グランデ」「幻滅」「従妹ベット」「従兄ボンズ」などを含む、1833~48年に出版された九十余の小説の総題。風俗研究・哲学的研究・分析的研究の3部門に大別され、フランス社会全体を描いている。

¹¹ “arı dil”の意味でのトルコ語を使う。つまり、他の言語から借用された言葉や言い回しを使わない。「純粋トルコ語」の運動自体とは区別している。

¹² 20. *Yüzyıl Türk Edebiyatı* 4, p. 355.

¹³ ヌールッラー・アタッチは、*Uçan Daireler* (『空飛ぶ円盤』)の出版後、タフスィン・ユジェルに“dair”や“air”といった単語について批判している。その後、ユジェルはこのような言葉を作品中に使わなくなったと語る。 *Görünmez Adam*, p.53.

ほかに、地方独特の言葉や言い回しを使う点が挙げられる。アナトリアの言葉を使うことで、物語に独特な雰囲気を与えている。

・ユーモアのある表現

タフシン・ユジェル作品で、ユーモアや皮肉、コミカルな雰囲気は重要な要素の一つである。いろいろな作品の評価の中でも、この点についての指摘は多く見られる。¹⁴一方で、タフシン・ユジェル自身は、「ユーモア小説」を、ただ読者を笑わせる目的で大げさに書いた小説であるとした上で、自分の作品をそれらとは区別して認識して欲しいと語っている。¹⁵*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)で、兵役から帰ってきたばかりの主人公ジュマリーが父親から用事を言い付けられる場面を次のようにコミカルに書いている。¹⁶

…すぐに次の朝早くから出発する必要があると告げた。

「分かったか？」

ジュマリーは二年間の兵役での習慣から、中指をズボンの縫い目に押し付けて言った。

「了解、父上。」

次の例は、主人公ジュマリーが悩みを打ち明けるが、誰にも理解されない場面である。¹⁷

そして(郡長は)マズルムの方を向き「頭が少し混乱してきた。つまり、君の考えでは、これをフランス語の *être* と *avoir* のようなことなのかい？」と言った。

軍の分隊長は：「自分もそんな風に思う。英語の *to be* と *to have* のようなことだと。」と同意した。

マズルムは笑って「なるほど、*être* と *avoir* や *to be* と *to have* のような、いや、もっと混乱している。*être* と *avoir* は互いにしばしば入り乱れているじゃないか。人間のことは難しい...。」

チェイレック・ハムディは裁判官と軍の分隊長と郡長を見た。

「つまり、私の理解では、ジュマリー・カラパラのハムレット状態が始まり、*to be or not to be* に向かっているということです。」

マズルムは笑って「うん、そんなような事だ。悪い状態で気の毒だな。」と言っ

¹⁴ Fethi Naci は 1991 年 7 月 12 日付の *Eleştiri Günlüğü* で *Aykırı Öyküler* (『対立の物語』) にゴッリのようなユーモアが見られると指摘している。 *Görünmez Adam*, p.118.

¹⁵ *Görünmez Adam*, p.119.

¹⁶ Tahsin Yücel, *Bıyık Söylencesi*, Can Yayınları, 1995, p.6

¹⁷ *Bıyık Söylencesi*, pp.97-98

た。

このようなユーモラスな表現は、物語の中に数多く見ることができる。そして、このような表現の中にしばしば皮肉や風刺を含ませている。

・構成

Bıyık Söylencesi (『髭の話』) は先に挙げたようにコミカルな表現をしている一方、物語の構成は破滅へと向かっている。ヌケット・エセンは *Peygamberin Son Beş Günü* (『ペイガンベルの最後の五日間』) の悲喜劇的要素を指摘しているが¹⁸、*Peygamberin Son Beş Günü* (『ペイガンベルの最後の五日間』) だけでなく、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』) や *Yalan* (『嘘』) についても悲喜劇的な部分が確認できる。

タフスイン・ユジェルの作品には、語り手が一人称 ben (私) で書かれるものと、登場人物のうちの誰でもない「ある語り手」が出てくるものがある。特に、故郷エルビスタンを舞台に展開されている物語では、一人称での語りはあたかも自分の体験したことを描いているようにも考えられるが、本人はこれを否定している。¹⁹語り手の ben (私) は決して彼自身ではないが、一人称 ben (私) が使われることで、話の中に飛び込みやすくする効果を読者に与えている。一方、話の中から独立した語り手は、登場人物の誰よりもストーリーをよく理解し、人物の心理を読んでいる。²⁰例えば、*Yalan* (『嘘』) では、語り手の説明に、同じく語り手の口調で、次のように脚注が入る。「ユスフの元の苗字がエルバサンであったことをすぐに明らかにしよう。」²¹ここからも、アフメット・オクタイが指摘するように、読者に後のストーリーを先取りさせたり、予見させ、緊迫感や疑問を促す効果を作品の中で確認することができる。

・題材

作品で故郷エルビスタンを題材にしていることをしばしば指摘される。²²本稿で扱う *Bıyık Söylencesi* もその一つであることは先に触れた。1983 年に出版された *Ben ve Öteki* (『私と他人』) の中に入っている物語は全てエルビスタンを舞台に展開している。そのほか、*Komşular* (『隣人』) に入っている二つの作品や、*Uçan Daireler* (『空飛ぶ円盤』) に入ってい

¹⁸ Nüket Esen, “1983-1994 yılları arasında roman ve hikaye,” *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi Yüzyıl Biterken*, cilt12, p.432.

¹⁹ *Görünmez Adam*, p. 98.

²⁰ *Yalan* (『嘘』) における特徴の一つとして Ahmet Oktay が指摘している。

Ahmet Oktay, “Yazınsal bir doruk,” *Virgöl*, 16 Kasım, sayı 56, 2002, pp.16-17.

²¹ Tahsin Yücel, *Yalan*, Can Yayınları, 2001, p.12.

²² Atilla Özkırımlı は「小説でアナトリアの町(エルビスタン)を舞台に選び、地方の人々、印象、生活様式を描いている」と指摘している。20. *Yüzyıl Türk Edebiyatı* 4, p. 356

る半分以上の作品もエルビスタンを舞台としている。下に例に挙げるのは、*Ben ve Öteki*(『私と他人』)の中の“Yürümek”(「歩くこと」という作品の一節である。²³

数年間、いつも彼が歩いているのを見た。市場で、キョプリユバシュで、ジャハン川の岸で、オテゲチェの狭い狭い通りで、街のはずれで、音もなく小さな歩幅で歩き続けた。朝も夜も、ゆっくりと、地面に埃を立てないようにしながら、目は遠い空虚に向けられながら。

タフスィン・ユジェルは、エルビスタンで起こる出来事を通して、アナトリアの町の生活や人々を描く。この描写が、物語に独特な雰囲気を与えている。

また、作品のテーマとしては、社会問題、アナトリアや町の現実、個人の価値観が指摘される。²⁴ベフチェット・ネジャティギルは、社会の下層階級や中産階級の人の日々の生活の苦悩、崩壊、経済的困難を挙げている。²⁵それに加え、最近の作品には特に社会の変容が題材として取られている。また、何かへの熱中、対立、異常性は、登場人物中に頻出する特徴であると、タフスィン・ユジェル自身は語る。²⁶

(3) 作品紹介

タフスィン・ユジェルはこれまでに、長編小説(roman)、短編小説(öykü)、研究(inceleme)、エッセー(deneme)、そして翻訳(çeviri)という幅広いジャンルで執筆活動をしてきた。ここでは、長編小説と短編小説のジャンルに絞って紹介したい。

() 短編小説

Uçan Daireler (『空飛ぶ円盤』)

1949～1954年に書いた15の短編小説から成る112ページの本である。これは彼が初めて出版した本であり、「人生の中で重要な本だ」²⁷と語っている。この本が出版されたときの喜びや誇りは、ほかの本では得られなかったという。しかし、同時に「(自分の)本の中では重要ではない」²⁸とも語っている。その理由は、まだ作家として修行中の身である時の作品で、いろいろな作家の影響を受けた実験的な書き方をしているからだという。内容は、新聞で空飛ぶ円盤のニュースを知った主人公が、妙案を思いつき、より良い世界を空想し

²³ Tahsin Yücel, *Ben ve Öteki*, Ada Yayınları, 1983, p.105.

²⁴ *20. Yüzyıl Türk Edebiyatı 4*, p. 355.

²⁵ Behçet Necatigil (haz.), *Edebiyatımızda İsimler Sözlüğü*, Varlık Yayınları, 1991, p..

²⁶ *Görünmez Adam*, p. 121.

²⁷ *Görünmez Adam*, p. 99.

²⁸ *Görünmez Adam*, p. 99.

て仕事に遅刻するという、現実と空想が入り混じる物語から始まり²⁹、15のうちの半分以上はアナトリアの町（エルピスタン）での生活の断面（例えば、退屈な生活、目立った出来事、悲しい出来事）を描いているという。また、大都市への移動を描いたものもあるが、それらは、若者の純粹で正直な生活の理想を並べたありきたりの物語である、とタフスィン・ユジェルは語る。この作品に対する彼の反省によれば、全体を通して、すべての出来事がよどみなく流れるように説明されていることが特徴的だが、言葉の選択、特に「混ざりけのない」トルコ語の使用の面では、あまり努力が見られない。しかし、一方で、（タフスィン・ユジェルの物語の）根底にあるユーモアや、コミカルな雰囲気は、既にこの作品の中にも詰まっているという。³⁰

Haney Yaşamalı（『ハネイは生きるにちがいない』）と *Düşlerin Ölümü*（『幻想の死』）

Haney Yaşamalı（『ハネイは生きるにちがいない』）は9の短編小説から成り、1955年にイエニリック出版から出版された。この作品は、1956年、サイト・ファイク短編小説賞（Sait Faik Hikâye Armağanı）を受賞した。実際のところ、この作品への評価には賛否両論があり、特に同世代の作家たちからは痛烈な批評を受けた。その一方で、肯定的な評価もたくさんあった。ヌールッラー・アタッチは、*Günce* 誌の中で、「*Haney Yaşamalı*（『ハネイは生きるにちがいない』）には、すばらしい物語がたくさんある。言葉もとても気に入った。タフスィン・ユジェルは *Uçan Daireler* 以降とても良くなっている。この先を期待している。」と書いた。

³¹*Haney Yaşamalı*（『ハネイは生きるにちがいない』）から3年後、1958年に、11の物語から成る *Düşlerin Ölümü*（『幻想の死』）がアタッチ出版から出版された。この作品は翌年、トルコ言語協会短編小説賞（Türk Dil Kurumu Öykü Ödülü）を受賞した。後に、*Haney Yaşamalı*（『ハネイは生きるにちがいない』）の題で、この二つの作品を一つにまとめた本を出版した。

二つの作品をまとめた理由として、これらが、同じ方向性を持っていたこと、同じ模索が行われたことをタフスィン・ユジェルは挙げている。*Haney Yaşamalı*（『ハネイは生きるにちがいない』）と *Düşlerin Ölümü*（『幻想の死』）は意識的な言葉の模索、形式の模索が行われた作品である。ヌールッラー・アタッチの批判³²に影響され、言葉を極めて「混ざりけのない」ものにした。作品中に“ve（「そして、また」の意）”という単語を一つも使わなかった。タフスィン・ユジェル自身、これら二つの作品では独自の形式を進歩させたと語っている。

²⁹ 20. Yüzyıl Türk Edebiyatı 4, p. 352.

³⁰ *Görünmez Adam*, p. 97.

³¹ *Görünmez Adam*, p. 99.

³² 5°-ş°でも触れたが、前年の *Uçan Daireler* の出版後、使用したアラビア後起源の単語“dair”や“ait”のことで批判を受けた。

Anadolu Masalları (『アナトリアの民話』)

1957年、ヴァルルック出版から、こども古典シリーズの一つとして出版された。ヴァルルック出版から10版まで出され、その後、ヤプ・クレディ出版から出された。この本は、母親から語り継がれた民話を、本質の部分は変えずに、エピソードなどを付け加え改善し、5つの民話で構成した。後に、*Haney Yaşamalı* (『ハネイは生きるにちがいない』)の中の短編小説の一つ“Sümüklüböcek”(「なめくじ」)を民話の後に加えた。「(*Anadolu Masalları* (『アナトリアの民話』)は)ヴァルルック出版が子供向けの本を出していなかったら、書かなかった本」³³だと後に語るが、この*Anadolu Masalları* (『アナトリアの民話』)は彼の最も売れた本でもある。

Yaşadıktan Sonra (『生きた後に』)、*Dönüşüm* (『帰還』)と*Ben ve Öteki* (『私と他人』)

Yaşadıktan Sonra (『生きた後に』)は1969年に、*Dönüşüm* (『帰還』)は1975年にそれぞれ出版された。これら二つが一貫した特徴をもつ短編集であったため、1983年に、二つの作品をまとめ、いくつか新たな短編小説を加えて出版したのが*Ben ve Öteki* (『私と他人』)である。彼によれば、最初からこのような構想があった訳ではなかったらしい。始めに書いたいくつかの物語の中に、語り手の親友という設定で「メメドアリ」という名の人物を登場させたことがきっかけだった。「この人物が『観察者』の役割をすることで、その観察から、物事を生き生きとした証言という形で読者に間接的に届ける事ができ、メメドアリの存在は、物語の構成、人物や出来事の表現に役立った。このため語り手のそばにメメドアリを登場させ続けることにした。こうして、1969年までに書いたものを*Yaşadıktan Sonra* (『生きた後に』)に集め、その後1975年までのものを*Dönüşüm* (『帰還』)に集めた。この二冊の本のすべての作品は、語り手と観察者メメドアリの二人を土台としていることだけでなく、エルビスタンのオテゲチェ地区を舞台に物語が展開されることでも共通しているため、二つの作品を合わせたほうがより良いものになると考え、いくつかの物語を新たに加え、*Ben ve Öteki* (『私と他人』)としてまとめたのだ」³⁴とタフスィン・ユジェルは語る。「(*Ben ve Öteki* (『私と他人』)の)16の物語は、もう少し頑張れば、一つの小説の16の部分になり得た。しかし、これはこれで良かった。」³⁵と後に語っている。

Aykırı Öyküler (『対立の物語』)

1989年にジャン出版から出版されたこの作品は、5の短編小説から成り、全186ページである。それぞれの物語が政治的なメッセージ性を持っていることが重要な特徴とされる。タフスィン・ユジェル自身は、政治批判のほかに80年クーデターのイデオロギーや資本主

³³ *Görünmez Adam*, p. 105.

³⁴ *Görünmez Adam*, pp. 105-106.

³⁵ *Görünmez Adam*, p. 106.

義に関しても言及していると話す。例えば、物語の一つ、“Büyükbaba”（「祖父」）は、秩序と儀式の好きな頑固な校長先生の面白おかしい物語である反面、右派の独裁者を表したとという。また、“Tarih/ Coğrafya”（歴史/ 地理）は、ある学生と、アメリカびいきの地理の先生、心配性の歴史の先生との周りに起こる愉快的な学校の物語であるが、その中でアメリカ賛美に対する批判をしているという。“Ağalar ve Beyler”（「領主と長官」）は不幸な愛の物語である一方で、オスマン朝とアナトリアの対立を描いているらしい。ただ、タフスイン・ユジェルは、物語が教育的、教訓的なものにならないよう、メッセージを出来事から間接的に伝えようとし、生き生きとした人物を説得力のある出来事の中に描こうとした。³⁶このために“Tarih/ Coğrafya”（「歴史/ 地理」）や“Ayna”（「鏡」）は政治的な面に触れずに読むこともできる。また、この作品にはユーモアの要素が多く盛り込まれているところも特徴的だとされる。³⁷

Komşular（『隣人』）

この作品は1999年に出版された。5つの短編小説からなるが、*Ben ve Öteki*（『私と他人』）や*Aykırı Öyküler*（『対立の物語』）のように全体を通して、それぞれの物語に共通点があるわけではない。³⁸このため、5つの物語の中で、評価や好みもさまざまである。1999年世界書籍雑誌年間編集賞（Dünya Kitap Dergisi Yılın Telif Kitabı Ödülü）を受賞した。

（ ）長編小説

Mutfak Çıkmazı（『行き詰まりの台所』）

これは、1960年に出版された初めての小説である。世の中や、若い女の子の変わりやすく甘ったれた振舞いにうんざりした大学生が、一人暮らしの家の支出を抑えるために始めた料理に心奪われ熱中してしまい、他のことを考えられなくなる。この熱中の根本には現実逃避があり、彼を昔の状態に戻し成功させようと束縛する家族は、彼とは正反対に生きる者として描かれる。最後には、彼はその犠牲となり殺されるという内容である。³⁹短い小説ではあるが、たくさんの出来事を通して話が描かれているという。

Peygamberin Son Beş Günü（『ペイガンベルの最後の五日間』）

初めての長編小説 *Mutfak Çıkmazı*（『行き詰まりの台所』）から32年後の1992年に出版され、話題になった作品である。主人公は、社会主義者であり、短い間しか一緒に暮らせなかったにもかかわらず先立たれた妻と強い絆で結ばれた、情け深く、勇気のある一方でか

³⁶ *Görünmez Adam*, p. 116.

³⁷ *Görünmez Adam*, p. 116.

³⁸ *Görünmez Adam*, p. 120.

³⁹ *Görünmez Adam*, p. 131.

なり鈍く才能の無い詩人、ラフミー・ソンメズである。夢の破滅や真の社会主義者の詩人であることを書きながら、拘留されるという予感の中で続く主人公の人生が描かれている。⁴⁰ 題の「ペイガンベル(預言者の意)」はラフミー・ソンメズのペンネームである。内容は、政治的な面を多く含んでいる。左派や拘留、クーデター、戒厳令についての言及が数多くあるが、マルクス主義や社会主義自体に関して風刺や批判はしていないという。⁴¹1993年、この作品でオルハン・ケマル小説賞を受賞した。

Bıyık Söylencesi (『髭の話』)

1995年の作品である。自分のシンボルとなった髭が次第に自分から離れて動き出し、それに振り回されるために自分自身を表に出せない主人公の苦悩や時代の流れによって変容する社会や文化の一端を描いている。コミカルなタッチである一方、主人公が最後の破滅までどんどん崩れていく内容からは、悲喜劇的な要素を見ることができる。故郷エルビスタンを舞台に話が展開され、「Evet(はい)」の代わりに「Heye」というなど、地方独特の言葉を使うことでその雰囲気を出している。⁴²第二章でストーリーを詳しく紹介し、第3章で「エルビスタン」像について分析する。

Vatandaş (『同胞』)

1996年に出版された自伝的小説である。もとは、1954年に書いた10ページほどの短い物語で、*Uçan Daireler*(『空飛ぶ円盤』)のなかに収めていた。1964年、パリにいる頃に *Preuves* という雑誌に短編小説を一つ載せるといふことになり、フランス語で始めから書き直した。1975年には、小説と言えるくらいの長さに達したが、最終的に出版されるのは1996年になった。

日常的だが興味深く面白い人物や出来事を通して、社会の墮落、道徳の崩壊、偽善などを批判するとともに、正直な人の孤独感を表現した。⁴³

Yalan (『嘘』)

2002年に出版された現在の時点で彼の最も新しい作品である。プロローグとエピローグを含む5つの部分から成る全553ページの小説で、彼がそれまでに出した作品の中で最も長い。主人公は、いつも孤独で目立たないが並外れた記憶力を持つユスフ・アクスという個性的な人物である。登場人物や出来事の多さから重層的な構成であることや、ユーモアの

⁴⁰ *Görünmez Adam*, pp. 135-136.

⁴¹ *Görünmez Adam*, p. 142.

⁴² *Görünmez Adam*, p. 148.

⁴³ *Görünmez Adam*, p. 156-157.

質の高さ、政治的な皮肉の深さが指摘される。⁴⁴社会の上層を構成する人々の生活形態や思想、新しい社会、新しい価値観を描いている。⁴⁵

⁴⁴ Kaan Özkan “Tahsin Yücel ile Söyleşi ‘Yalan’ her şeye karşın bilinçlenmenin öyküsü”
http://www.adanasanat.com/tahsin_yucel/soylesi_hurriyet_gosteri_haziran_2002_kaan_ozkan.htm
(*Gösteri* 誌 2002年6月号に掲載されたもの)以下 Tahsin Yücel ile Söyleşi や Armağan Ekici,
Temmuz 2002, <http://home.planet.nl/~ekici000/yalan.htm> による

⁴⁵ Tahsin Yücel ile Söyleşi

第二章：Bıyık Söylencesi (『髭の話』)

第一章では、タフスィン・ユジェルの人生とその作品について見てきた。その中で、彼が、故郷エルビスタンを多くの作品で描いてきたことが確認できた。数多い作品の中から、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』) を本稿で取り上げた理由は、この作品がエルビスタンを描いた全ての作品の中で最も新しい 1995 年の作だったことにある。ここには、1995 年「現在」、彼が最も世の中に伝えなかったことが描かれていると考えられる。従って、彼が考える近年の社会的問題や、社会に対する主張を知ろうとする上で重要な作品であると考えられる。

この章では、本稿で取り上げる小説 *Bıyık Söylencesi* (『髭の話』) について、全体的な話の流れを小説の章ごとに紹介したい。

主要な登場人物

ジュマーリ・クルクチュ...主人公

ベルベルズィヤ...主人公ジュマーリが通う理髪店の店主

ベドリエ...主人公ジュマーリの妻

ハジャリファ...主人公ジュマーリの父親

トゥズスズ・ヴァイサル...主人公ジュマーリの親友

ハズィゼット・オジャック (ペンネーム：アシュク・ハスレティ) ...理髪店仲間 詩人

粗筋

主人公ジュマーリ・クルクチュが、兵役から 2 年ぶりに故郷に帰ってくる。父親ハジャリファの言い付けで、6 日間かけて小作人たちに地代を取りに行き、その帰り道、12 日間くらい伸び放題になっていた髭を剃りに理髪店ベルベルズィヤのもとに寄った。2 年間の兵役の間に、髭を蓄えない習慣がついて、むしろ、それを好むようになっていたが、店に入るとその雰囲気ですっかり満足し、そんな考えは吹き飛ぶ。ベルベルズィヤはジュマーリの髪を切り、顎髭を剃った後、口髭を何とも言えぬ形に整えた。店にいた他の客たちは、それを見て「似合うだろう」と言ったが、ジュマーリは婚約者のベドリエがどのような反応をするか不安だった。ベドリエの肯定的な言葉を聞いて口髭を生やす事を決心した。ジュマーリの髭がどんどん濃く太く大きく成長する様は、周囲の人々の関心を引いた。ジュマーリとベドリエは結婚すると、幸せな生活が続いた。ジュマーリの髭はさらに成長し、顔さえ変わって見えるようになった。詩人アシュク・ハスレティはその見事な髭で詩を作ろうと思ったが、この時点ですぐに作る事はできなかった。

ジュマーリの口髭が大きくなるにつれ、以前よりもハンサムになったのは確かだったが、ベドリエは、次第にジュマーリ自体が変わってしまうように感じ、もう理髪店ベルベルズィヤのもとには行って欲しくないと感じた。実際、髭を整える度に顔や歩き方が変わっていった。一方、ジュマーリは髭が大きくなったために、夜も寝付けず、重たくて歩くのも大変だった。町の人々はジュマーリの口髭を一目見ようと通りに集まり、彼を見ると、その見事な髭に当惑しながらも祝いの言葉を掛けた。ベドリエはジュマーリの髭を好きになれない一方で、周りの女性たちには彼を自慢した。それまでジュマーリと不仲だったハジャリファも、彼に対する怒りを忘れて彼を自慢した。郡長をはじめ、人々はジュマーリの髭を賞賛した。ベドリエが出産すると、祝いに来る人が後を絶たなかった。人々の中で、ジュマーリへの敬意はより高まっていった。そんな中、ハジャリファの突然の死は皆を悲しませた。

ハジャリファは町の中で最も威厳のある人だった。葬儀の翌日、ベルベルズィヤは店に来たジュマーリに、ハジャリファの面影を少しでも生かすために、彼が好んで毎日着ていた服一式を着ることを提案した。それを実行したジュマーリを見て、ベドリエは反対したが、人々はそれを見て心打たれた。亡くなった父親と一体化しようとしているのだと理解された。人々のジュマーリに対する信望は頂点に達し、その後も続いた。二人目の子供も生まれ、年月が流れたが、やはり、ベドリエはジュマーリの髭に慣れなかった。ジュマーリもハジャリファの服を着るようになってから頑固になり、次第に二人の間に少しずつ溝ができ始めた。そんな中、ベルベルズィヤの忠告を受け、見事な髭を持つ男として振舞いに気を遣うようにした。例えば、ロカクタにはあまり行かないようにし、行っても酒は一、二杯で止める事、タバコを止める事、男らしく振舞う事、ロカクタでは皆の分の勘定も払う事、帽子や眼鏡を付けない事である。ベドリエとベルベルズィヤの間を行き来する日々が続き、ベルベルズィヤとジュマーリはより親しい間柄になった。ジュマーリは自分でも、髭がとても良い状態であること幸せに思っていたが、いつまでもそれを保てるわけではないことを聞き、ショックを受けた。髭のことはベルベルズィヤに任せた。一方、ベルベルズィヤはジュマーリとベドリエの仲が上手くいっていない事にショックを受けた。

ジュマーリは 35 歳になって、10 歳も年上のケフリバル・バジュに恋心を抱いた。彼女に入れてもらったコーヒーをある時は一人である時はトゥズスズ・ヴァイスルとともに 10 回くらい飲んだ。ベドリエもベルベルズィヤも、これに反対した。ジュマーリはこれに従い、ケフリバル・バジュの誘いは断るようしたら、自分の恋心が 10 代の時に抱くようなものだったことに気が付いた。40 歳になって、周囲の人たちの髭には衰えが見え始めていたが、

ジュマーリの髭は、頂点に達してから 15 年たっても全く変わらず、健在だった。ある時、新しくやってきた住民関係の役人チェイレック・ハムディはジュマーリの苗字クルクチュ（骨接ぎ、整骨師の意）が髭に合わないと言い始めた。髭に似合う苗字を探し、裁判官のもとで正式にカラパラ（黒い半月刀の意）という苗字に改名した。それを聞かされたベドリエは猛反対して憤慨した。これをきっかけに二人の仲はますます険悪になった。アシュク・ハスレティは髭の詩を書こうと努力していたが、まだ書き出しさえできずにいた。

ジュマーリは次第にカラパラと呼ばれることに苦しみを感じ始めた。自分が髭のためだけに存在しているように感じ始めたからだった。ベドリエがカラパラの苗字に猛反対した時に、「自分はジュマーリと結婚して苗字を変えたのであって、髭と結婚したくはないから苗字をもう変えたくない」と言ったことは正しかったと気付いた。人がカラパラと呼ぶ時、それはジュマーリ自身でなく口髭を指していた。カラパラという苗字は髭につけられた名前であり、自分にもぴったりしないと思うと苦しくなった。しかし、この苦しみを誰にも打ち明けることはできなかった。そんな時、アシュク・ハスレティの娘ギルイエテルを中心に、夜、皆が寝静まると口髭（カラパラ）が飛ぶという噂が女たちの間で広まっている事を知り、気が狂ってしまいそうになった。ジュマーリは苗字を元に戻したいと思い、チェイレック・ハムディに話すが、チェイレック・ハムディはもとより、誰にも理解されず、再び元の名前に戻ることはできなかった。

その後、ベルベルズィヤの店にはあまり行かなくなった。中年の会話でうずもれている雰囲気嫌だったからだ。苗字がカラパラになってから、髭のこと以外見えていなかったが、もっと自分自身を表に出して、それを換えようとしていた。そんな中、ジュマーリの写真が髭コンテストに残った最後の 16 人の一人として新聞に載った。コンテストに勝手に写真を送って応募したのは、ベルベルズィヤのようだった。皆、それを見て騒いだが、ジュマーリは髭は神聖なものだから自分は競わないと言い張り、ベルベルズィヤと激しい言い合いになった。新聞社の人、きっとあなたがトルコ髭チャンピオンになるからと説得に来て話には乗らなかった。この事をきっかけに、ジュマーリはベルベルズィヤの店には行かず、ベルベルムスタファの理髪店に行くようになった。しかし、髪や顎髭は任せても、口髭だけは自分で整えた。朝に 1 時間、夜に 30 分は自分の部屋にこもって整えた。だが、髭以外にも疲れた時に頭を休めるために部屋にこもるようになった。外との関係を絶って、外出したくない時にもこもった。元気がなくなり放心した状態にベドリエは心配するが、ジュマーリは何も話さなかった。もはや、皆を感動させるためでも、名誉のためでも、自分の楽しみのためでもなく、ただ口髭のために自分の時間を費やしているようだった。

た。アシュク・ハスレティは 60 歳になり、髭は白く衰え、ジュマーリの髭もいつかこうなるのかと恐れた。そして、詩を書けずにいる間に、自分のような髭になってしまうのだろうか考えた。

ジュマーリは三月の終わりから熱病に侵され、4 月半ばのある日、体の調子が良かったので鏡で髭を見た。髭は三週間間に白髪混じりになっていた。ジュマーリはショックを受けた。髭の白髪は増えているようだった。ある日、トゥズスズ・ヴァイサルとともにベルベルムスタファの店に行くと、ジュマーリの髭が衰えていることを知らされた。解決策を求めて、二人はベルベルズィヤのもとに向かった。しかし、これと言った解決策は無かった。ジュマーリは道を歩きながら、自分の口髭をどんなに深く愛していたのかを知った。髭のために生まれ、生きてきていたんだとさえ思った。死んだ髭とともに生きることは醜いことのように、そのまま生き続けられないと感じた。カフェへもベルベルムスタファの店にも行かなくなった。ただ、家と自分の店を往復し、道で友人に会ってもほとんど話さずに去った。そのうち、外にも出なくなった。ある日、アシュク・ハスレティがチェイレック・ハムディやベルベルムスタファなどたくさんの人を集めて、ジュマーリを励ましに行った。ジュマーリは最初は戸惑って眺めていたが、次第に笑い始めた。集まった中の一人が、伸び放題になっている髪と顎鬚を切って、口髭を蘇らせ、もう一度以前の生活に戻る事を提案した。

ベルベルムスタファはジュマーリの髪と顎鬚をベルベルズィヤがやるように短くした。髭はまるで昔のようになった。ベルベルムスタファにカフェに来る劇に誘われて、行くことにした。そんな気分になったのは、病気以来初めてだった。カフェでは、ラクを飲みながら笑い、冗談まで言った。その後、劇団がカフェに来て舞台を観た。幕間に劇団の中の女の一人からということで、ウェイトレスがラクを持って来た。その女が誰かに似ているように感じ、よく分からないまま好きになった。女に誘われると、自分が髭のもとでそういう事に遠ざかっていたのを思い出して、ついて行った。しかし、髭の衰えとともに性的な力も衰えていた。翌朝、家に帰ると部屋にこもった。髭を見て、やはり昔のような髭では無くなっていると感じた。食事に呼ばれても、部屋にこもったまま髭の中のだめな毛を一本一本取っていった。全て取り去って大きな鏡を見ると、そこ映ったのは、兵役に行く前のひものような普通の髭だった。あの見事な髭がなくなった味気のない顔をぼかんと見た後、何も考えずにはさみで喉を突き刺し自殺した。

ベドリエは倒れているジュマーリの顔に、兵役よりも前のジュマーリを見て、やっと自分のジュマーリが帰ってきたと思いながらも、その死を心から悲しんだ。しかし、葬儀から何週間かたつと、ジュマーリの不在にも慣れた。ジュマーリの死から 1 年後、娘のネスイメは結婚した。息子のアリフは、ジュマーリから受け継いだ洋品店や農業などの仕事をネスイメの夫と協力して大きくした。会話の中で、ジュマーリの名前が出ると、人々は何よりもまず髭を思い出し、笑った。ただ、ベルベルズィヤはジュマーリの髭について飽きずに話し、また、悲しんだ。他の人と同じように、ジュマーリの死も次第に人々から忘れられていった。ベドリエの家からもムスタファの店からも、写真が外され、見られる事はなかった。唯一、ベルベルズィヤの店は、当時のように壁中に写真が貼られたままだった。客の多く、特に若者は、もうこの店には来なくなった。ジュマーリの死から 10 年か 12 年後、人々はこの店に入ると三面を写真に囲まれ、物語の世界に入ってしまったように感じた。もう、古い友人の客しか来なかった。ある日、店を知らずにやって来た若者二人は、写真を見て、よく出来た合成写真だと言った。ベルベルズィヤとアシュク・ハスレティは、ジュマーリの髭の「事実」が崩れ始めたと思った。ベルベルズィヤは翌日店を閉じた。アシュク・ハスレティは髭の詩を早く作ろうと思った。作れるだろうと心から信じていた。

第三章：タフスィン・ユジェルのエルビスタン

第二章で見てきたように、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)には、その雰囲気や人間関係などの面からアナトリアの小さな町を思い起こさせる要素が多々ある。これまでに何度も述べてきた通り、タフスィン・ユジェルは、故郷エルビスタンを背景や題材にした作品を数多く出している。しかし、意外なことに彼がエルビスタンで暮らしたのは、小学校卒業までの12年間である。ガラタサライ高校中等部入学以降は、(途中フランス留学の期間を除いて、)現在に至るまでイスタンブールで暮らしている。従って、彼の描くエルビスタンは、1930年代から40年代前半の様子であると考えられる。

この章では、(1)タフスィン・ユジェル自身が語るエルビスタン、(2)*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)の中のエルビスタン、(3)小説の中でのエルビスタンの役割について見ていきたい。

なお、(1)タフスィン・ユジェル自身が語るエルビスタンでは、Kaan Özkan の *Görünmez Adam: Tahsin Yücel Kitabı* でのインタビューをもとにし、(2)*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)の中のエルビスタンでは、Tahsin Yücel の *Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)からの引用(日本語訳)を用いる。

(1) タフスィン・ユジェル自身が語るエルビスタン

本題に入る前に、エルビスタンについて簡単に説明しておこう。エルビスタンは、周りを高い山に囲まれた大平原の中央、マラシュ県の北東部、ジェイハン川のほとりに位置する。ヒッタイトの遺跡やセルジューク朝の建造物が残る歴史的な町である。オスマン朝時代は、アナトリアの文化の中心の一つに数えられ、メドレセから多くの学者を輩出したらしい。⁴⁶

しばしば作品の中に登場するオテゲチェ地区は、タフスィン・ユジェルの生まれ育ったエルビスタンにある地区であり、ガーリップリッキは町の墓地の呼び名である。小説の中では、ジェイハン川は「ジャハン」という発音で登場する。

さて、タフスィン・ユジェルはエルビスタンをどのような場所と捉えているのか。まず、彼の記憶に残るエルビスタンを見ることにしよう。次の文章は、彼がエルビスタンでの少年時代を語った言葉である。

目を閉じるだけで、エルビスタンで過ごした幼少期の記憶、オテゲチェ地区やその住民の姿が蘇ってくる。ジェイハンの両脇に並んだ1階または2階建ての日干しレンガの家々、夏の暑い夜に寝床を広げて眠ったまっすぐな屋根、夏の埃、冬のぬ

⁴⁶ Hüsamettin Toros, *Türkiye Ansiklopedisi*, Ofset Matbaa ve Cilt Fabrikası, 1971, p.1391.

かるみ、雪や氷で閉ざされた狭い通り。数棟向こうの野菜畑や果樹園。カドゥおじさんのジェイハンの岸からガーリップリッキの下のアフシンまで広がる、りんごのなる庭。朝、屋根から下りるとき、ジェイハンの透き通った水で跳ねる巨大な魚。私たちの家は、ジェイハンの岸から2メートルのところにある平屋だった。そこで、母、兄、姉と暮らしていた。牛やアヒルやにわとりも生活の一部だった。父、姉、兄が小学校を卒業するまでに次々亡くなった。このことから、一般的な見方では、私の幼少期が苦しみに満ちたものだったろうと見るかもしれないが、同時に分かりやすく、平等な、自由で自然な環境だったことを思い出す。⁴⁷

タフスィン・ユジェルは、「人生を、エルビスタンの人々の中で知り、理解したように感じる。エルビスタンは、自分の文学だけでなく、人生の根本的領域を占める場所である。」⁴⁸と語る。しかし、彼によれば、その「エルビスタン」は既になく、現在あるのは、彼が暮らしていた頃よりも4、5倍大きくなり、生活形態や人間関係など、どの視点から見ても以前とは変わってしまったエルビスタンであるという。⁴⁹

タフスィン・ユジェルにとってのエルビスタンは、常に、「彼の暮らした」エルビスタンであり、彼の「心の一部がいつもそこにある」⁵⁰ことから、様々な面で彼の土台となっている場所だと理解できる。また、彼の語るエルビスタンは、ひとつの場所として、風景としてだけではなく、生活形態、人間関係、価値観などの社会的、文化的要素が含まれていることが明らかである。

(2) *Bıyık Söylencesi* (『髭の話』) 中のエルビスタン

それでは、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』) にどのような「エルビスタン」を見ることができるのか、() 風景 () 人が集まる場所の様子 () 町の人々に分けて、それぞれ見ていきたいと思う。

() 風景

タフスィン・ユジェルは、ジェイハン川の美しく穏やかな情景を次のように描いている。

人ごみからぬけて、はげ山の麓の土の道を西に向かって歩いた。ガーリップリッキの下を過ぎた。左にはポプラの木々の間からジャハン川が見えた。ゆっくりゆっくり流れていた。長い羽をもった黒や白のたくさんの鳥が上空をキーキーと鳴きな

⁴⁷ *Görünmez Adam*, p.18.

⁴⁸ *Görünmez Adam*, p.93.

⁴⁹ *Görünmez Adam*, pp.93-95.

⁵⁰ *Görünmez Adam*, p.20.

がら飛びまわっている。何羽かがすーっと降りてきて水面をかすめ、また上空に舞い上がっていった。(ジュマーリとトゥズスズ・ヴァイサルの)二人は古いすずかけの木にもたれながら、しばらく鳥たちを見ていた。一瞬のうちに、どっちに行ったのかさえ分からなかったが、鳥たちが辺りから去って行ってしまったことに気付いて当惑した。ジャハン川は鉛のような青に変わっていた。すぐに辺りも同じ色に覆われた。(p.12.)

手を伸ばしてカーテンを開けた。部屋は太陽の光に満ち溢れた。遠くの方に、ジャハン川が降り注ぐ光を受けてきらめき、カモが羽を水面に打たせながら飛び、泳ぎ、走り、そして次々に、そこからは見えない所へと向かって飛び立つのを見た。(p.116.)

次の文章には、冬の凍てつくような寒さがよく表されている。

二月の始めだった。晴れてはいるが空気は氷のように冷たかった。山の村からロバで薪を運んできた村人たちの村長のような口髭と顎髭から垂れ下がる氷柱が人々を恐れおののかせていた。(p.20.)

厳冬のナイフのような寒さだが、人々は通りに出て行った。(p.27.)

この小説の中には、風景が具体的に描写されている箇所はそれほど多く出てくるわけではないが、これらはエルピスタンの自然をよく表している箇所だと言える。町の様子や構造を風景の一部として窺い知ることのできる部分もある。例えば、次の文章からは、ハジャリファの店(後にジュマーリの店)は市場の中にあり夜になる前に閉まること、クズルジョバ通りは若者の好むような通りであることがわかる。

店に戻るために、ユカル市場に向かった。しかし、今にも夜になるところだったので、一度、洋品店ザリフの所に行かなければ、ハジャリファの店はとっくに閉まっているにちがいがなかった。トゥズスズ・ヴァイサルはクズルジョバ通りをちょっとぶらぶらしようと誘った。町の若者、特に休暇を故郷で過ごしに来ている大学生たちは、この時間帯にこの辺りをうろろうした。(pp.11-12.)

ジェイハン川に架かる橋の前にはモスクやベルベルズィヤの理髪店があることもわかる。

ジャハン川の岸で石をジャリジャリと踏みながら歩いて...(略)...下のモスクに着

く前に板の橋の所で立ち止まった。欄干に肘をつき、細い尖塔に目をやった。
(p.125.)

キョプリュバシュにあるベルベルズィヤの店の前まで来た時、モスクから人が出て
きているところだった。(p.32)

Bıyık Söylencesi (『髭の話』)は、エルビスタンを舞台にしているものの、「架空の物語で
ある」⁵¹から、このような町の風景(特に町の構造の部分)は、実在したのかどうか定
かではない。しかし、エルビスタンを舞台にしている以上、この風景から感じ取られる
雰囲気はエルビスタンのものと言って差し支えないだろう。

()人が集まる場所の様子

この小説の重要な舞台である理髪店の様子を見てみよう。次の部分では、理髪店の内部
の調度品や装飾がよく表現されている。

二隅に付けられた金の新月と星の装飾がついたシンボリックな絶世の美女の写真、真
ん中のムスタファ・ケマルの写真の下側に長い紙の房飾りを付け、鎖で天井から吊
られた大きな正方形の板を針から外し始めると、四隅からハエが飛び立った。(p.9.)

板のような、高くて広いクルミの肘掛け椅子に座らせた。座布団をゆすって座った。
首の周りに真っ白なカバーを掛けて... (略)(p.9.)

扇風機の風、はさみのジャラジャラいう音、石鹸の熱、カミソリの感触に深い満足
感を得た。ベルベルズィヤのクルミの肘掛け椅子は板のようだったのは確かだが、
絶世の美女(の写真)の周りは口髭のある人たち(の写真)で満たされていたり、
前にある鏡の周りにひしめき合った証明写真の口髭の男たちが自分を見ているの
を目の前にして、頭の中にはもう髭に対する疑問はなくなっていた。(p.9.)

上に出てくる「扇風機の風」や、ほかにも「薪ストーブの上でよく温まった湯を使って顔
を洗った」(p.21.)というように、季節の様子も時々垣間見られ、視覚、聴覚、触覚の三つ
の感覚を用いながら、読者の想像を促している。

また、下の文章からは社交場としての理髪店を見ることができる。店主は、面識のない
客同士を紹介して知り合わせる役目を果たしている。

⁵¹ *Görünmez Adam*, p.152.

ベルベルズィヤは（ジュマーリとトゥズスズ・ヴァイサルの）二人を座らせた。二人のことを知らない役人や学校教師たちに紹介した。（p.9.）

後ろで小さな銅像のように座っている見習い弟子に、「さあ、君、扇風機をつけて。ジュマーリはハサン・ヒュセインの娘と婚約していて、兵役から戻ってから初めて来たんだ。さわやかな髭剃りをするとしよう！」と言った。（p.9.）

また、理髪店に来ている客は、ただ髭を剃ることだけではなく、仲間と話をすることを目的にし、髭を剃らなくても店に入っただけで仲間たちと話を楽しんでいることが読み取れる。

ただ髭剃りに来るのではなく、いつでも好きな時に来て、隅に座って話したり、冗談を言ったりして時間をつぶしていた。だから店はいつも混んでいた。ときどき立ったままそうしている人さえ見られた。（p.9.）

いつものように、その日も、混み合っている人の大多数が暇つぶしに来ている人たちだったので、30分も待たずにジュマーリは鏡に向かってクルミの肘掛け椅子に座った。（p.120.）

続いて、カフェについて見てみよう。カフェは、待ち合わせをしないで人と会うことのできる、いわば、家とは別の「居場所」である。

同じ日の夜、カフェで、しばらく表に顔を見せていなかったチェイレック・ハムディが腰掛けを引いて向かいに座った。（p.85.）

そこでは、人々は専らゲームや話をして楽しんでいる。

カフェに行って、自分の前に座った者とピシュピリック⁵²やタヴラをやった。（p.54.）

（カフェで）チェイレック・ハムディとタヴラの前に座ったら、全てを忘れた。（p.86.）

時には、「カフェで口論にな（p.55.）」ることもある。カフェでは決まった仲間とだけでなく交流が見られ、ここにも町の社交場を見ることができる。次の部分は、カフェに

⁵² カードゲームの一つ。

劇団が来るときの様子である。

カフェの大部分に、加工してない板の腰掛け台がずらりと並べられていた。それらは今から満席になっていた。机はこんな時にはいつもやるように、開けられたドアの先に、それぞれくっつけられた。こうして広い腰掛けが作られ、上に何枚かじゅうたんが敷かれた。そして、ドアの前にならぶような腰掛けが現れた。
(p.138.)

カフェでは、町の娯楽として劇が時々催され、そこには大勢の人が集まる様子がある。

() 町の人々

ここでは、町の人々が描かれている箇所を、さらに、「儀式と習慣」、「人々の好奇心」、「髭に対する反応」、「ネットワーク」、「尊敬の対象」の表現されている部分に分け、それぞれを順に挙げていくことにする。

・儀式と習慣

ジュマリーとベドリエの結婚式後の場面である。親戚や近所の人たちが家に集まり、二人を祝っている様子が見える。

…一人は紺色の花婿衣装を、もう一人は白い花嫁衣装を、一人は見事な口髭を、もう一人は金の首飾りを身につけて横に並び、手に手を取りあって、撮影された結婚式の写真是この明らかな証拠だった。写真是最後にガラスにはめられ、花嫁の部屋のずっと前から用意されていた場所に掛けられると、部屋をいっぱいにした親戚や近所の人たちは、この写真がこの壁に掛けられることが必要だったと言わんばかりに、ベドリエが嫁入り道具として持って来た彫刻付きのクルミの椅子を叩いて「なんとすてきな！共に生きるよう祈ろう！災いの目で見られませんかように！」と言いながら、二人がお互いにどれほどお似合いであるか言葉にしようと努めた。(p.19.)

次は、ジュマリーとベドリエの第一子アリフが生まれ、町の人たちが金銀の御守りを持って、家に祝いに来ている様子が描かれている。

およそ二週間後、ベドリエが初めての出産で男の子を産むと、これもジュマリーの「才能」に関係付けられた。「男らしい男に男の子が生まれた」と皆は言った。郡長はすぐ翌日、妻を連れてジュマリーのドアを鳴らした。母親と父親を祝って、赤

ん坊の肩に、靴底に打ち付ける鉄ような金の御守りを付けた。…(略)…郡長の後から、収入役、検事、医者、裁判官、町長、中学校長、その妻、そして賞の受賞者が来た。町のすべての重要人物が妻をジュマーリの家に向かわせた。町全体が神聖な任務を行うかのごとくアリフを見にジュマーリの家に来た。誕生から10日たっても、やって来る人たちは後を絶たなかった。子供の枕、産着、ゆりかごの取っ手は金貨や金銀の御守りでいっぱいになった。地区は何週間も興奮と喜びの空気に包まれた。年少者も年長者も、花嫁たちも、娘たちも、初めて子供を産んだかのように止むことなしにベドリエや赤ん坊の話をした。声や仕草を一つ一つ奇跡のように説明した。(pp.41-42.)

ハジャリファの葬儀に関しては、「ハジャリファの死は皆を深い悲しみに沈めた。葬儀には町全体が参加した。」(p.43.)とあるが、その当日も、夜になると家に人が集まる。翌日もコーランを読みに来ているのが次からわかる。

夜、男部屋でも、町の年長者の所で食事をしている時も、コーランを全て暗記している7人がそこで読むコーランを聞いている時も、彼(ジュマーリ)が泣いているのを見た者はいなかった。(p.43.)

(翌日、)ハジャリファの「部屋」と名付けられた男部屋に入った時、あたりはコーランを読みに来た町人たちでいっぱいだった。(pp.47-48.)

このように、結婚式や葬式自体の詳しい描写はないが、そのような大切な出来事の後に、町の人たちは、祝ったり、コーランを読むために、当事者の家に集まってきていることが分かる。

・人々の好奇心

次の文章は、ジュマーリの口髭のことを聞きつけた人々が見に来ている場面である。厳しい寒さにも関わらず、大勢の人が集まってきている。

厳冬のナイフのような寒さだが、人々は通りに出て行った。トゥズズ・ヴァイサルは石段に座って彼を待っていた。向かいの石段では、普段は若者と馴れ馴れしくしないようにしているハジャリファが、(ジュマーリの)舅のハサン・ヒュセインと向かい合ってタバコを吸っていた。ドヴデュエ・アフメット、自治会長のハジュ・ファク、キョイネックスィズレルのゲイラニ、タカヴットラルのピラル、ジュルック・ハサンが、つまり、町の主要な男たちが彼の周りに集まって、地面にしゃがんでい

た。彼らのわきには大きい子供も小さい子供も、町のはるか遠くのほうから来ている若者も集まっていた。(p.27.)

そして、人々はジュマーリを一目見ようと、次々と通りに出て彼を待つ。

その朝、通りはいつもより何倍か混雑していた。全ての通りのすみに、目を大きく大きく開けた子供たちがジュマーリの口髭を指差した。予期しない時間に予期しない場所から、人が出てきた。ある者は身じろぎもせずただ立ち止まって見た。ある者は壁の下の方で、手を胸に「こんにちは。お気をつけて行ってらっしゃい！」と言い、またある者は、特に年寄り、二、三人で道の真ん中に出て、ジュマーリの知らない儀式の聖なる動きをやってみせるかのごとく、ゆっくりゆっくり近づきながら、通り三つ向こうからでも聞こえるような感動の叫び声を上げ、誰から髭の事を聞いたのか伝えた後、髭を近くから観察した。こんな髭は見たことがないと言いながらジュマーリを祝い、「なんとまあ、見事な！神が災いの目から隠してくれますように。」と言った。(pp. 28-29.)

市場で混雑はもっと凄かった。さらに、彼らを見ると、歩行者は立ち止まり、店で座ったり買い物している人は途中でやめて、石畳に出てきた。(p.29.)

しかし、人々はやはり店の前に出てきた。歩いている時には立ち止まった。顔に満足げな笑みを浮かべて長い間見つめた。(p.31.)

このように、自分の見てないもの、未知のものに対する、町の人々の好奇心の強さを見ることができだろう。特に、子供たちは大人に増して好奇心旺盛であり、何かがあるとすぐに集まってくる。

周りに子供たちが集まってきた。ジュマーリは微笑み続ける羽目になった。(p.85.)

夕方、後ろにたくさんの子供を連れて、記者がジュマーリのドアを鳴らした。(p.108.)

・口髭に対する反応

初めてベルベルズィヤの理髪店に行った帰り道の場面である。会う人のほとんどが挨拶のついでに口髭を話題にしている。

たくさんの人に出くわした。その朝に会った人もいれば、兵役から戻ってきてから初めて会う人もいた。しかし、皆、「こんにちは」のすぐ後に口髭のことを話した。15分ほどの間にほとんど同じことを20回くらい繰り返した。(p.12.)

理髪店でジュマーリの口髭がどんどん変化する場面であるが、ここでも他の客はその様子を興奮しながら見ている。

顎鬚を剃り口髭を整えるのを、一步下がった所からじっくり眺め、突然狂人のように叫んで散っていったのは、またジュマーリの髭に集まった。「ほら、始まったぞ！ほら、始まったぞ！進んだぞ！」と言って甲高くさげんだ。「よく分かっていたんだよ、こんな風になることは！こんな髭は自分には絶対生えないな！」客たちは真ん中に爆弾が落ちたかのようにその場から飛びあがった。(p.17.)

町の人が口髭に対して、災いの目で見られないように、不幸が降りかからないように、と気遣っているが、他の場面でもしばしば、髭に対してこの種の言葉が掛けられている。

店の前や中で髭がとても見事であると言う人たちや、「なんとまあ、災いの目で見られませんかように！」と言う近所の人や友人に返事することさえ...(略)(p.30.)

次は、ジュマーリの髭を気に入った郡長が話す場面である。

また黙った。そしてまた、同じ興奮した声で、『しかし、私はこの口髭を知っている。ずっと昔から知っている。この口髭は伝統的なトルコの髭だ。大柄でがっちりとして顔立ちの良い若者たちの、イエニチェリたちの髭だ。3つの大陸で馬を走らせた祖先の髭だ。』と言った。(p.40.)

髭に対する反応を全体から見ると、人の口髭に対する関心が一般的に高いこと、口髭を大切に考えていること、トルコ人として髭に対する特別な思いがあることが窺える。

・ネットワーク

町の人々は噂好きで、情報は瞬く間に町中に知れ渡る。ジュマーリがベルベルズィヤ、ハズィゼット・オジャックとともに郡長に呼ばれた時も、ジュマーリが記者を追い払った時も、そのことはすぐに広まった。

その日、カフェでも店でも通りでも家々でも、全ての会話はめぐりめぐって郡長の部屋での4人の会話に行きついた。(p.41.)

翌日、ジュマーリがイスタンブルの記者を家から追い払ったことがいたるところで知られると、町人たちは態度を変えた。(p.109.)

有りもしない事がどこからともなく噂となることさえある。アシュク・ハスレティが娘に話した作り話も町中の女の子に知れ渡る。誰かの勝手な憶測も人々の間に広がっていく。

「カラパラ(ジュマーリの髭を指している)が夜な夜な窓から出てさまようことを話していなかった？」ジュマーリは鳥肌が立った。石のように固まって立ちすくんだ。そして「それをどうやって知ったんだい？」と口ごもった。「これは皆知ってるわ。女の子達はいつも話しているのよ。」とネスイメは言った。「どの女の子達が？」「みんなよ。」(p.92.)

(二人の)仲の断絶状態を見て、ベドリエが(ジュマーリの)親友のトゥズスズ・ヴァイサルとともにジュマーリを裏切って不貞をはたらいていると言う者がいた。ベドリエを知らない人にとってこれを信じる事は簡単だった。(p.114.)

町の人が、店、カフェ、理髪店、通り、家の中といたるところで会話をしている光景が見られるが、情報が町中に広がる場所から、それぞれに繋がったネットワークが存在していることを確認できる。

・尊敬の対象

医者や郡長などといった社会的な地位を持った人や兄弟や妻などそれに関係する人が、町の人々に一目置かれている存在として描かれている。次の部分には、町で唯一の医者の兄弟に対して、あからさまな形で失礼な態度をとることはできない、というベルベルズィヤの心情が表われている。

ハジュ・レイレッキ(理髪店の椅子のこと)に、町で唯一の医者ベスィムの兄弟シャーヒンが座っているところだった。ベルベルズィヤは、シャーヒンを退かしてジュマーリを座らせるような、思いきった行動は取らなかったが、機械を驚くほど速く動かした。(p.32.)

次は、郡長が初めてベルベルズィヤの店に来て、他の客たちが驚き、緊張している場面で

ある。

郡長がドアから入ってくると、ハズィゼット・オジャックやオスマン・ホジャなど中にいた人たちは皆飛びあがった。郡長がハジュ・レイレッキ（理髪店の椅子のこと）のあと長いすに座った後も誰も口を開こうとはしなかった。（p.38.）

次の文章では、ジュマーリの息子が生まれた時に家に来た、町の「重要人物」を列挙している。

郡長の後から、収入役、検事、医者、裁判官、町長、中学校長、その妻、そして賞の受賞者が来た。町のすべての重要人物が妻をジュマーリの家に向かわせた。（pp.41-42.）

しかし、町の人々の尊敬する対象はそのような人ばかりではなかった。例えば、「（ジュマーリの長男）アリフの誕生で、ジュマーリに対する尊敬や絶賛は以前よりも増した（p.42.）」し、次の例も、社会的地位のようなものとは別物である。

（ベルベルズィヤは、）家や店や市場やカフェで、故ハジャリファが、ジュマーリのために服を故ザリフェに作らせたことと、郡長ネシェットはジュマーリがこの服を着ることが伝統的な敬意のしるしであると見なしていることを説明した。このようにして、（町の人たちの）ジュマーリへの信望は頂点に達した。（p.51.）

このことから、町の人々のジュマーリへの尊敬は、郡長や医者に対するものと違い、彼の人間性に基づいていると理解できる。

さて、（ ）風景（ ）人が集まる場所の様子（ ）町の人々をそれぞれ見てきたが、ここで、全体をもう一度まとめてみると、*Bıyık Söylencesi*（『髭の話』）に見られるタフスィン・ユジェルの「エルピスタン」は次のようになると考える。

美しい自然の中にあるこじんまりとした町である。カフェ、市場、理髪店、町の通りには、賑わいがあり、人々は会話を弾ませる。人と人との繋がりは強い。結婚式や葬式、出産など、大切なことの後には、人々がその家に出向き、祝ったり、コーランを読む。人々は非常に好奇心が強く、何か変わった事があれば、表に出て見ようとする。町の出来事にも関心が高い。また、噂好きで出来事は人から人へ伝わり、町中へ広がるくらいの情報網がある。このため、町で起こっていることの凡そは皆が知っている。人々は、社会的地位の高い人に一目置いてはいるが、人を見るものさしはそれだけではなく、人間性のような、

より道徳的な観点から観察し、判断している。

一言で言えば、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)における「エルビスタン」は、「人と人々が密接な関わり合いと、伝統や道徳のような人間的価値観を持つ社会」であることがわかった。

最後に、口髭に対する人々の関心も付け加えておこう。*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)の作品の中であるから、作品中の人物が髭に対してこれだけの関心を抱いているのではないかという見方もできるが、この作品を自然に描き、また人々に受け入れられることは、やはり髭へ関心が実際の人々の中に少なからずあり、作品の中だけのものではないと考える。

(3) 「エルビスタン」の役割

(2) で見てきたように、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)の中には「人と人々が密接な関わり合いと、伝統や道徳のような人間的価値観を持つ社会」としてエルビスタンが描かれていた。このエルビスタン像は、作品の中でどのような効果を持っているのだろうか。

一つは、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)のエルビスタン社会は、読者にノスタルジーを感じさせる効果があると言えるだろう。タフスィン・ユジェルが描くエルビスタンの年代だと考えられる1930～40年代から現在までの期間は、世界的に見ても様々な点で変化のあった時代である。トルコでもクーデターや政権交代を経て社会構造や経済構造が大きく変化した。それに伴って、都会を中心に伝統的価値観や人との関わり合いが次第に薄れている。そのような中で、彼の描く1930～40年代の世界は、古き良き時代として、たとえこの時代に生まれてない世代であっても、どこか懐かしさを感じさせる働きがあると考えられる。

また、この働きにより、タフスィン・ユジェルが*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)で描いている社会の変容をより鮮明で印象的なものになっていることも指摘できる。読者に彼の「エルビスタン」への愛着を沸かせたことにより、それが崩れた時の衝撃を大きなものになっている。

エルビスタンを題材にした他の多くの作品とは異なるオテゲチェ地区の扱いについても、最後にここで触れておきたい。短編集 *Ben ve Öteki* (『私と他人』)の中ではしばしば現れる「オテゲチェ」や「エルビスタン」の地名は、*Bıyık Söylencesi* (『髭の話』)には全く見られない。このように直接的に場所を特定することを避けたことには、彼のエルビスタン像を、あるアナトリアの町の像として、より普遍的なものにしようとする意図があると考えられる。そして、そうすることによって、全くの架空とは違った、現実味を帯びた雰囲気を作り出すことも可能になる。

終わりに

本稿では、まず、タフスィン・ユジェルと文学との関わりを、生い立ちを通して確認し、作品の特徴やこれまでに発表している作品について紹介した。そして、彼の作品の第一の特徴として挙げられる、題材としての「エルビスタン」について取り上げ、*Byık Söylencesi* (『髭の話』)における彼のエルビスタン像を作品中から読み取り、その効果について考察した。その結果、*Byık Söylencesi* (『髭の話』)における彼のエルビスタン像は、人と人との密接な関わり合いの中で、伝統や道徳のような人間的価値観を持つ社会であることがわかった。そしてそれは、作品中で読者に「懐かしさ」を感じさせ、作品のテーマである社会の変容を印象付けていた。これによって、読者に今の社会を考えるきっかけを与えている。

今回の考察から、タフスィン・ユジェルが、近年、世の中に主張しようとしたことは、社会変化によって失われつつある人間らしい社会をもう一度見つめ直す必要性であったことが明らかになった。

今回、*Byık Söylencesi* (『髭の話』)におけるタフスィン・ユジェルのエルビスタン像を、読み取る作業では、彼が描いたであろう1930~40年代前半のアナトリアの小さな町の様子を、生き生きとした形でイメージすることができた。文学はその時代の地域の社会や文化を、後の時代まで新鮮さを失わずに伝えることができる。その意味でも、文学は重要であると考えられる。今後、トルコ文学研究が日本でも活発化し、トルコ文学が広く紹介されることを期待している。

参考文献

- Tahsin Yücel, *Bıyık Söylencesi*, Can Yayınları, 1995
- Tahsin Yücel, *Yalan*, Can Yayınları, 2001
- Tahsin Yücel, *Ben ve Öteki*, Ada Yayınları, 1983

- Behçet Necatigil (haz.), *Edebiyatımızda İsimler Sözlüğü*, Varlık Yayınları, 1991
- Hüsamettin Toros, *Türkiye Ansiklopedisi*, Ofset Matbaa ve Cilt Fabrikası, 1971
- Kaan Özkan, *Görünmez Adam: Tahsin Yücel Kitabı*, Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, 2001
- Kaan Özkan, “Tahsin Yücel ile Söyleşi ‘Yalan’ her şeye karşın bilinçlenmenin öyküsü”
http://www.adanasanat.com/tahsin_yucel/soylesi_hurriyet_gosteri_haziran_2002_kaan_ozkan.htm
(Gösteri 誌 2002 年 6 月号に掲載されたもの)
- Mahil Ünlü, Ömer Özcan, *20. Yüzyıl Türk Edebiyatı 4*, İnkılâp Kitapevi, 1991
- Nüket Esen, “1983-1994 yılları arasında roman ve hikâye,” *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi Yüzyıl Biterken*, cilt12